

この画集はドイツライプツィヒにおいて発行された絵画の年鑑で、なんと1904年、明治37年のもので、日露戦争が始まった年のものです。光村にはこの本がオ1巻で、年ごとに発行された(1904~1913年)計10冊のものがああります。(現在社史編集部)

内容は3色の凸版(銅版)で刷られており、スミ版はなく、必要によつて金版が使はれています。線数は150線、たまに175線あり。

インキの色はルーペで見るとかなりにごつており、それによつてかいつて暗いところのバランスがうまくいつているようです。それにしても画、全体をみると鮮やかな色を感じさせており色の対比がうまく使はれていると思ひます。

さていちばん学ぶべきことはグラデーションが、ハイライトから中間シャドーまでよく西己分されており、ハイライトの調子もよく出ていると同時にシャドーのメリハリがよくついています、これはどうゆう理由からでしょうか。

この当時は勿論カラーフィルムがありません、したがつて組立カメラなどに乾板(硝子板に乳有りを引いたもの)を入れ、レンズのところには3色分解フィルター(赤・緑・青紫の3色の硝子板)を入れながら1枚、1枚分解撮影をした3枚の分解ネガから製版をしたもので、製版の人は直接画を見ながら、あるいは最低でもその絵を見ながら紙焼きした印画に油絵具で色着けしたものを¹³⁷見ながらの製版です。カラーフィルムでは1回の露光で撮影するフィルムであるため、ハイライト、シャドーの調子は寝てしまい、それをそのままカラー通りといつてスキヤナーに掛けたのでは調子がつぶれてしまいます。

三色製版の方法は3枚の分解ネガから¹³⁷湿板法で透し撮りしてポジを撮るか、又は乾板に密着してポジを作る、この段階で多少のポジ修正が考えられます、次に湿板法(光村でも昭和35年頃まで使用)で網ネガをとり、網莫の大小におきかえられた硝子板となる、次に銅板に重クロム酸カリなどを主成分とした感光液を塗布し、これに網ネガを密着して焼付け現像すると黒い網莫の部分の感光膜は光に当らないため流れ去つて銅板の地肌が出ます。

さてこの版を過塩化鉄の腐蝕液につけると銅板の網莫のところが腐蝕されて凹み凸版が出来てくるが、これを絵柄を見ながら3枚の版のバランスを見ながらニスで腐蝕を止めてしまつたりしてくりかえし版を作り、途中で何度も校正刷をくりかえしながら製版してゆくのです。



图1



图2

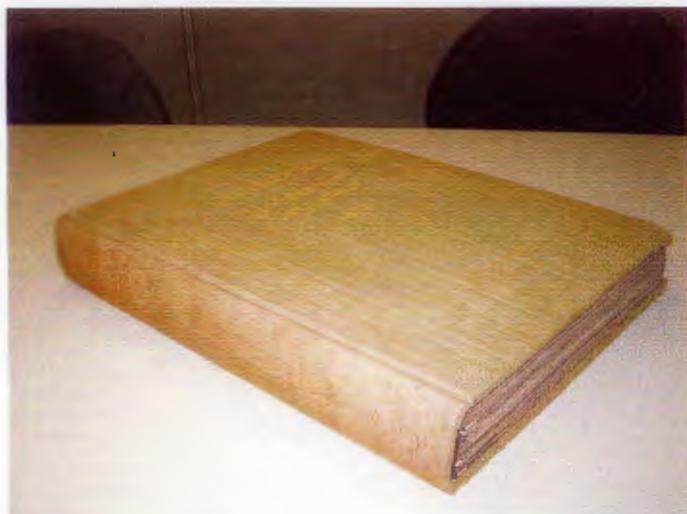


图3

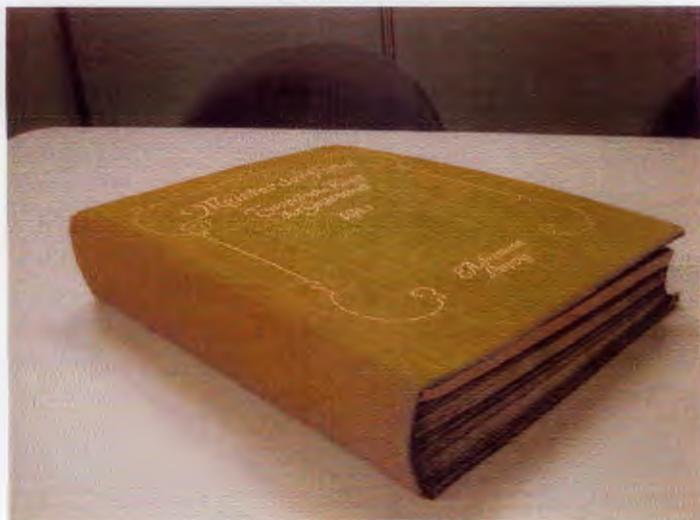


图4

图1 1904年度版表紙

图2 1913年度版表紙

图3 1904年度版全体

图4 1913年度版全体

